

子どもらといっしょに新しくなる

—幼稚園の四月—

倉橋 惣三

四月は新しい子らが、幼稚園に來る月である。相變らずの建物と庭とではあるが、きのうに變る全く新しい世界になる。相變らずといつても、保育室は隅々念入りに掃除され整理され、準備に氣を入れる人のお部屋では、机の列べ方、戸棚の置き方にも、新しい變つた趣向を試みられるだろうし、頼なんかも取りかえられて、面目一新の姿に生れ變ることも多かるう。保育終了式の日の部屋飾りも、前年度のものという譯で、思い切つてさつぱりと取り除かれて、一切が新規始なりといつた氣分に生きかえらされるだろう。庭はそり／＼位置を移し、總體のたすまいを變えるということはできない

が、そのかわり、人の手よりも自然の手が、地の底から空の上から加えられて、土の光澤も、草の緑も、木々の若芽も、蕾も、花も新しい容に生れかわる。まことに、新客を迎えるにふさわしい新しい幼稚園にならずにいれない。そこへ集つて來る子らが、この新しい幼稚園を喜ぶのはいうまでもない。

問題は、その新しい子らを受けもつ先生方が、果して此の新しい世界の人になりきるかどうかである。

勿論、子どもらが年々入れかわるように、先生方が入れかわつては、幼稚園にとつて悲しむべき大騒動である。先生は引きつゞいて變動のないことが願わし

い。内の趣向は變え、庭の季節は變つても、同じ園舎、同じ庭にこそ、その幼稚園の落ちつきがある。古い園舎、古い庭には、安定以上の貴重さがある。先生もそれと同じである。先生の度々變る幼稚園はぐら／＼ゆれる家のようなもので、どつしりした保育の場所となり得ない。

が、その同じ先生も、新入園児を迎える四月には、心氣一新せずにはいられない筈である。子どもだけが新しくなつて、先生の保育が舊態依然とあつては、その新客の新鮮さにつりあわない。新しく芽を出し、新しく花を開く庭の木々にも恥かしい。幼児園の四月は、子どものためばかりでなく、先生方によつても、新保育期である。

○ 先生というものは蓄くなり易い。停滞し易い。固定し易い。自分を自分の型に入れ易い。繰りかえしの安閑に慣れ手前勝手の氣樂に任せ、熟練巧者の名において、人にも許され自らも許し、その實澁潤たる自分を失つて仕舞う。幼稚園の先生にしてもその危険がないといえない。

それをよみがえらせ、新しくさせる途は種々ある。不斷の研究——叢書、聴講——わけても、根本の精神的教養は、その最も有効なことである。しかも、何んといつても、先生を生かすものは子どもである。その子どもらの中でも、初めて迎える新しい子どもらである。

だが、折角生の子どもによつて、自分を新しくして貰おうと願つてゐる先生にとつても、決して幸福でない。そこで、子どもを、そうならせないように心がけてゐることが、幼稚園の四月の第一の心がけである。

が、折角の新しい子ども、先生の方で型にはまつた、既成概念でのみ迎えては、新しい接觸は出來ない。そういう先生が目が、新しいものを新しいままに見得ないからである。況してや、自分の都合のいゝ型に入れようとしてかかつたのでは、生の子どもの生なまのところを見つけ難かつたりする。——その自分の都合のいゝ型なるものが、幼稚園の心得、早くいゝ子になれ、の羨しい、まことしやかな言葉を以て、はめこませたり、押しつけたりすることが常であるかも知れない。子どもは案外順應し易いものである上に、入園に當つて家庭で、幼稚園に順應せよ、順應せよと言ひきかせられてゐることが多いのである。子どもにも不

子どもを、生の子どもとして迎える心がけの實際としては、子らを一束に一括したものとして迎えないで、一人々々の子／＼として迎えることである。一人々々として迎えるからにはみんなが同じようであることを假りにも要求し註文しではならない。同じに扱わないというだけでなく、一人々々をその子らしくあらしめるところに、一番大切な秘訣がある。上手の先生というのは、子どもらを、ま

子どもを一人々々に活かしておくことは、魚を一尾々々游がせておくように、つかまえていくことには相違ない。或はつかまえられる子もあるかも知れない。だからといつて、先生のつかまえられる易いようになれというのは、干魚になれという恐ろしいことにもなり兼ねない。そこで、先生は、大層な苦勞をしなければならぬ。苦勞は新経過への直面である。こゝで長年の熟達のつもりを以てして、再び新しい保育を経験するのである。あの新參先生として、生の先生として、始めて幼稚園に來た日のように。古い先生が新しさを取りかえずには、この途しかなない。四月の幼稚園が興えてくれる絶好の機會である。

○ 一人々々に置くといつて、懐つねんとひとりぼつちに、ほおりつばなしにすることでは勿論ない。それは一人であつても、生きてゐる一人ではない。子どもも、時としては、靜に獨りにして置いて貰いたいこともあるし、そういうときは、そつと邪魔をしない心づかいもいるが、

そんなときこそ、その子のその子らしさが見つけられることを見のがしてはならない。僞屈とか、いぢけとか、非社會性であつてはならないが、自分の興味に没入しているのはいい。それこそ、その子の自分の世界に生きているのだから。

しかし、普通多くの場合としては、子どもらは、友達の中にまじつて遊んでいく。友達の中から、型に入れられもせず、押しつけられもせず、互の間は銘々自分を活かしている。寧ろ活かされていくといつていい。こういう遊び——所謂自由遊び——の姿においてこそ、眞にその子らしく活きるのである。

その時、成心なくその遊びの中にひき入れられてゆくことは、先生が子どもに化せられ、子どもに從つているのであつて、生の子に觸れ得る、極めて自然の場面である。子どもを先生の思うように、——豫定やきまりをもととして遊ばせているのでなく、子どもに遊ばせられていくのである。これは、いつの場合でも、保育の至境といつていいのであるが、殊に、新入園児に對して最も大切なことで

ある。つまり先生の子どもにする方法でなく、子どもも先生しかも生の子どもの生の先生になる自然の途である。そのために既に成の先生を離れて、新しい先生になれる。幼稚園生活を續けて、半ば或は全部、先生の子どもになつて仕舞つていく子どもらの中では、そこまで新鮮な反省に自ら活きかえることは、先生にとつてむづかしい。新入園児の場合にあつては、それが全く新鮮である。四月の幼稚園が先生にとつて貴重な所以である。

幼児の先生に受動の位置に立つ心がけが必要なのは、いつでものことである。しかし、始終そうで許りもいられないし、そうで許りであつてもならない。たゞ、新入園児の場合、この心がけが、大に尊重されなければならないのである。それが眞に幼児の幼稚園をそこに發生させる自然の法則であることは、こゝでは論じないとしても、先生が自分を新しくしてゆく四月の幼稚園の大切な心がけであることを、更めていゝたい。子どもたちを早く幼稚園の型に入れる工夫が、幼稚園の四月の行事のように考えられているこ

とが多いのに對して、このことを更めていふ必要がありはしまいか。幼い子らを入型に入れる位何でもない。古くなつた先生が、子どもによつて新しくなることは必ずしも容易くない。しかもその方が如何に、より多く大切なことであらう。幼稚園では子どもをおとなの世界のものにすることよりも、おとなが子どもの世界のものになることの肝要なのはいうまでもない。殊に四月の幼稚園においてそうである。四月の幼稚園は子どもの新入園期であると共に、先生の新入園期でもなければならぬ。新幼児の若草と共に、先生にも保育の新しい芽が萌え新しい花が開いてこそ、春四月の新しい季節が、ことしも幼稚園にめぐり來たといえる。

○
といつて、なにも、先生方が新衣裳や新化粧品に若がえるということではない。無暗にそんなことが行われたらお化幼稚園が出現するだけである。そんな作りこみではない。幼児生活に對する新しい感覺を若がえらせるのである。保育精神に對する新しい感激を蘇らせるのである。

子どもらと唄いならされたあの歌唱が、新入園児の新しい聲と共に新しい歌にうたえることである。うまくなり過ぎるほど繰り返されたあの遊戯が、新入園児の新しいリズムと共に、新しい遊戯におどれることである。口に慣れ切つたあのお話が新入園児の新しい興味と共に、新しいお話に話させることである。なおまた、餘りすら／＼と運ぶ保育は、保育者の心を、おつとりと波もなく流れさせ、よどませるかも知れない。先生の言うことをきかない子、勝手にわめき立てる子、ちよろ／＼とわきへこぼれる子、どろしたのかしく／＼泣く子、だしぬけに大泣きに泣きだす子。大體が幼稚園というところのわきまえがつき、おおよそは先生との契約が成り立つていた三月までの園児と調子がちがう。先生を困らせることも、まごつかせることも、はら／＼させることも、いら／＼させることもさへも度々あるであろう。従つて四月の幼児達は、先生にとつて手なれた幼児達のように、すら／＼とらくにいかないかも知れないが、それだけに、それでこそ、先

生に、新しいほゝえみを興え、新しい愛情を促し、新しい経験を生み、新しい保育活力を盛りあげさせることも、日々先生を新しい心にしてくれる月である。

(四頁より)ものが少くなくないが、その點を注意すれば、文藝の常として、表面から人間の道徳性を書き立てていないが、それでこそ却つて、しみ／＼と人間性のうるわしさを味感させて、ヒュ머니スチックな精神の側面的、又潜在的教養を興えられることが稀でない。

次に、最も力強い教養を受けられるのは、幸にして、民主々義的性格の人に接し交り得る機會である。それは必ずしも世に名ある人々と限らない。近隣市井の人にしても、敢て深い教養からでなく、その天性の資質において、そういう人が、却つて多かつたりする。そういう人々こそ、その點において尊敬を拂い、機に觸れ、尊に當り、その小さくとも貴い感化を受くべきである。人格の感化といふことがあるが、道徳的感化よりは、性格的感化こそ、こまやかにしみ通るものであつて、特に人格者といわれない人々の中にも、まことに人間らしい人があり、民主々義者と名乗らない民主々義人もあるものである。

この他にも、有效なる教養の途と機會とは幾多あるであろうが、特に以上の如き方面を擧げたのは、先生に必要なものが、民主主義的性格そのものであつて、民主主義的論議の知識に止まるものでないことを強調せんとしたからである。

性格は性格によつてのみ教育せられる。殊に、幼児の如き、性格とも名のつけられない性格基底に、民主主義、即ち人間尊重の、しつとりした、地底にたゞえたる清水のような教化を興えるものは、先生の性格、殊にその深い基底にたゞえてある民主主義性でなければ出来得ないのである。